

# 魔法のプロジェクト活動報告書

報告者氏名：房前 千里

所属：守口市立さつき学園(前期課程) 記録日：2019年2月8日

キーワード：見通し、自信、コミュニケーション、動画、写真、学び方、SNS

## 【対象児の情報】

○学年 義務教育学校(前期課程) 5年生 11歳(自閉症・情緒障がい学級在籍)

○障害の困難の内容 複数回答可(複数回答の場合には主たる障がいは◎)

◎知的障がいを伴う自閉症

■注意欠損多動性障がい(AD/HD)

## その他

- ・左眼の黒目の動きが悪い。
- ・バランスが悪く少しの刺激で姿勢が崩れてしまう。

## 【活動目的】

○当初のねらい(計画書の学習目標)と活動による方向性の確認状況

- ①自分でやろうとしているのに、困ったときやうまくいかない時には、自分で友だちや教師に伝えられるようになる。
- ②口や舌の動きを滑らかにし、相手に分かるようにはっきりと発音したり、会話の中で安定して使用できる語を増やす。
- ③ 少し難しいと感じる課題にもスモールステップで取り組み、自分で頑張ったらできたという経験を積む。

## ○活動の具体的方向性

- ① 自分で伝えたらうれしかった、安心した、うまくいったという経験をする。  
→問われたことに答えるだけでなく、自分から発信できるように。  
→困ったと伝えたことは解決できるように。
- ② 動画や録音機能を利用し、発音や声の大きさ、速さに気をつけて相手に伝わる話し方を学習するとともに、学習したことを日常生活で使えるようになる。
- ③-1 取り組みたいけれど、児童が難しいと思いこんでいる活動ができるようになる手立てを細分化し、動画や写真を利用しながら、自分で分かって練習したり、できるようになる。
- ③-2 書くこと、表記の間違いを確認し、正すことについてのハードルを下げ、自分の経験や考えを伝えたり、記録に残す。

○実施期間 2018年6月2日～2月8日

○実施者 房前 千里

○実施者と対象児の関係 週10時間の支援学級での学習のうち、週3時間を担当

## 【活動内容と対象児の変化】

### ○対象児の事前の状況

#### 〔コミュニケーション〕

- ・知っていても会話で使える語は限られていた。詳しく聞かれると話題を変えようとしたり、会話を終わらせたがった。また、早口で話し、相手に伝わっているかを気にする様子がなかった。
- ・好きなアニメや動画を見て知った言葉を、意味理解を間違ったまま使用していることがある。
- ・口の周りの筋肉をほとんど動かさずに話し、相手が聞き取れないことがあった。また、ラ行とダ行が置換している語もあった。

#### 〔学習〕

- ・児童に伝えたい内容があっても語彙が少なく、もういいと言うことが多かった。また、パターン化された日記調の文を書いて済ませていた。
- ・自分の手元を見ながらゆっくり書くことができず、字形が整わなかった。また、促音や拗音の表記の間違いが多くみられた。
- ・友だちと一緒に活動したいという意欲はあるが、道具をうまく扱えないため、取り組む前からあきらめている課題があった。
- ・語のまとまりを捉えるのが難しく、うまく読めなかったり、少し読んではできないとあきらめていた。
- ・自分で文を読み、問いに合った答えを自分で考えて書くという課題に取り組むことは苦手であった。

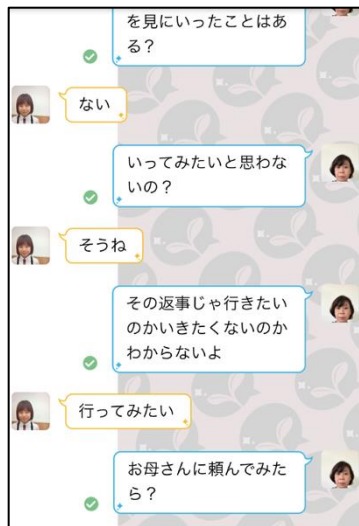
#### 〔バランス・目と手の協応運動〕

- ・重心が不安定で、ちょっと押されただけでも踏ん張れずに倒れてしまう。
- ・複数の細かな動作を同時にすることが必要な課題（リコーダーの演奏、家庭科など技能系教科）は、取り組む前から児童も保護者もできないと思い込んでいた。

### ○活動の具体的内容

#### ①自分で伝えたら「うれしかった」、「うまくいった」という経験のために

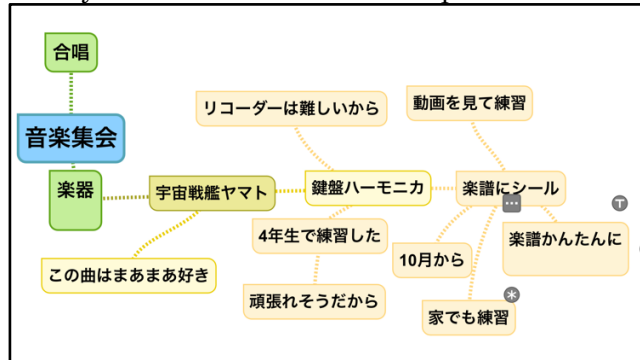
話しかけられても簡単な返事で済ませることが多く、自分の話したいことだけを伝えて立ち去ることの多い児童であった。また、いろいろ質問されると「もういいから」と遮ってしまい、やり取りして「うれしかった」「うまくいった」という経験の少ない児童であった。しかし、教師が保護者とモバイル端末でメッセージのやり取りをすることに興味を示したり、自分でも家庭で音声による入力を試そうとしていた。そこで、児童が自分で取り組める簡易な方法でできること、視覚化して理解すれば自分でやってみようとする児童であったことから、フリック入力や音声入力、スタンプでのやり取りもできる By Talk for School と Simple Mind+ を使用した。隣の席に座り、前日の出来事や、その日の予定を文字やスタンプでやり取りするところから開始した。iPad を自宅へ持ち帰り、時間を決めて互いにやり取りしたり、校内でも会話を続ける中で内容が分かりにくい時や、話題がそれてしまって本題に戻りにくい時など、音声会話と文字会話を併用した。また、話してみたい内容を整理するために、Simple Mind+ で内容を視覚化することにも取り組んだ。



By Talk for School

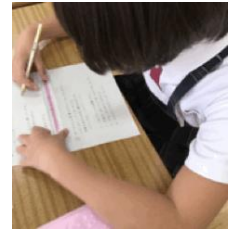
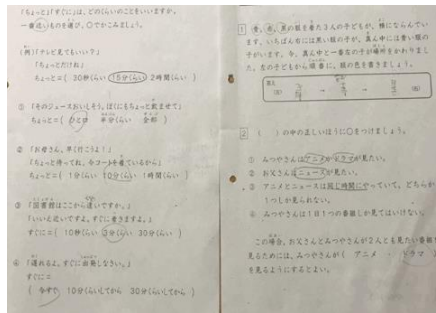


Simple Mind+



②相手に分かるように話し、会話を深めるために  
〇わかって使える語をふやす

意味を取り違えたまま使用している語の修正や、場面に合った言葉の使い方を学習するため、自分で読んで自分で問いに答えることに続けて取り組んだ。何を問われているのか確認したり、順序立てて考えれば、分かるという経験をするため、SNS やプリント学習など文字を介して学習していった。児童が苦手な、語の微妙なニュアンスを問う課題にも取り組んだ。



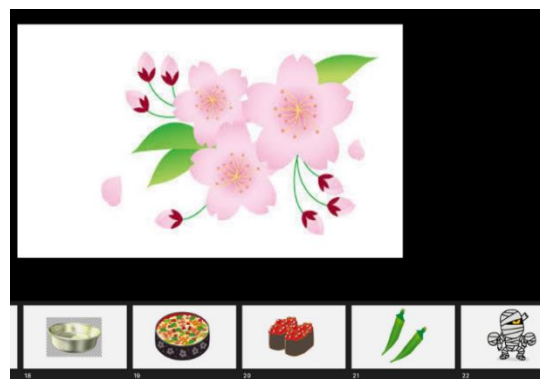
▲カラールーペを用いて、自分で問題に取り組む

〇口まわりの筋肉や舌の動きを調節する

口の筋肉や舌を動かし、正しい発音をするに取り組んだ。ストロー、コップの水を用いて、息を吐く、鼻で呼吸をする、吸った水をストロー内に何秒間か留め置くなど、舌の動かし方や息の調節の仕方についても学習し、自分で家庭でも練習していた。また、児童が自分の苦手なラ行音が含まれることば集めをした際、知らないと答えたことばでも、一緒にイラストを探せば、これは知っていたと答えることが多かったことから、プレゼンテーション画面に児童の発音しにくい音を含んだイラストを貼り付け、自作教材を作り、児童自身が操作して繰り返し練習することにも取り組んだ。



▲ストローとコップの水で口や舌の動きを確認している様子



▲発音することが苦手なラ行音が含まれる絵カードを児童と一緒に作成し、練習した。

○自分の話す様子を自分で撮影し、話す速度や発音の明瞭さを自分で確かめる



▲何度も自分で撮影して確認する様子



通常の学級で学習するプレゼンテーションの練習や、全校児童の前で行う劇のナレーターなど、話す速度や語のまとまりに気をつけて話せているか、自分で確認して練習するようになってきた。また、リマインダーに連絡帳に書く以外の連絡を音声入力するなど、自分の話した言葉が正しく認識され、文字で表されるか続けて確認した。

③少し難しいことも自分で頑張ったらできたという経験を積み重ねるために

○音読する



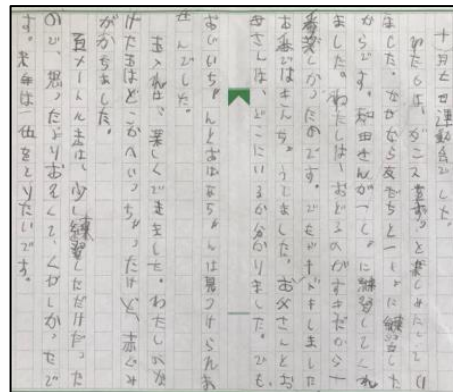
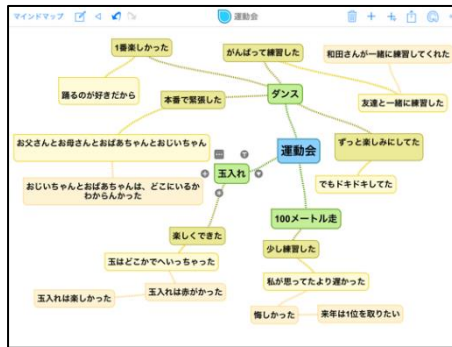
OMLET よめるんです



▲児童が音読に取り組んだ「竹取物語」

5年生教科書の詩や古典の短い文を音読するという目標を持ち、取り組んだ。音声による読み上げを、児童の読むスピードに合わせて、自分で設定し、分かち書きにしたり、語のまとまりをハイライトにあわせて読むことに取り組んだ。十分練習したと児童が納得できた時点で、児童の読みを録音し、正しく読めているか確かめていった。

## 〇書く

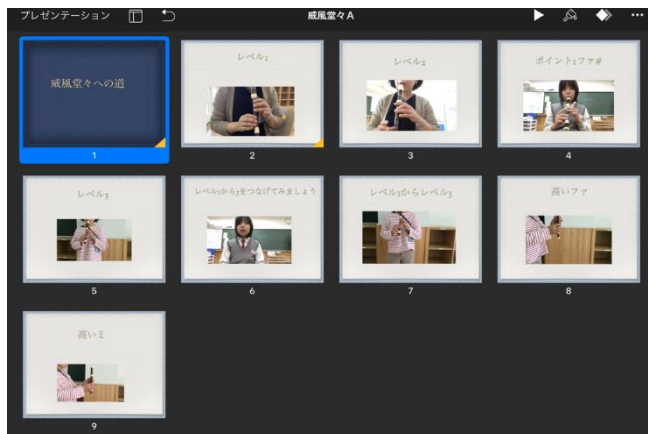


友だちに伝えたいことを書いて掲示される場面(作文や新聞)は、かな入力で行った。語の綴りがよく分からない時は、MIMの動作化で正しい表記を確認したり、音声入力も用いた。発音が改善されてきたため、たくさん書きたいのに時間がないというときには、途中から音声入力も取り入れた。また、視覚化して書くことを整理すれば、原稿用紙に書くことにも抵抗感が減ってきた。

## 〇わかって練習



Keynote



▲学年で合奏する曲を練習するための手順。本番終了後は、アニメーションのスクリーンショットをいれようと児童が計画していた。

▲児童が作成した卒業式で演奏する曲の練習手順

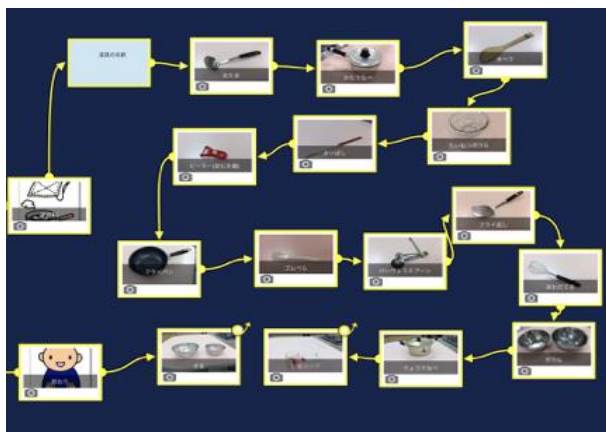
4年時には児童自身ができないと思い込んでいた「リコーダーの演奏に取り組みたい」という目標を立てた。友だちと並んでふいても自然に聞こえる程度に楽譜を簡易に修正した。教師がリコーダーをふく様子を児童が自分で写真や動画に撮り、学校や自宅で練習するための手順書を作成した。1音ずつの動画から1小節ずつ増やし、最終的には曲として演奏できるよう、児童と相談しながら構成し練習に用いた。また、4年生から練習している鍵盤ハーモニカでも演奏動画を練習用に構成した。最後には本番の動画も組み込み、上手くいったら使いたいと話していたスクリーンショットを加え、満足した様子であった。



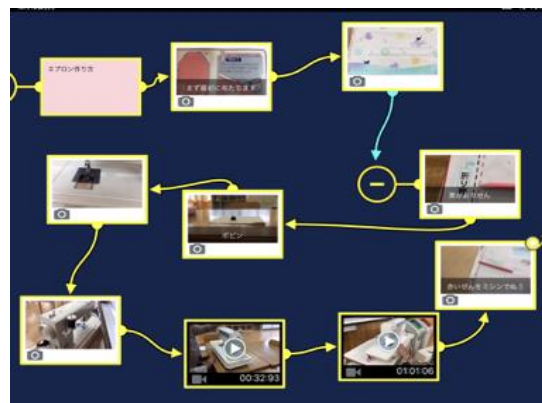
## ○わかって取り組める



ロイノート



▲調理道具の名前を覚えるために



▲制作の手順を理解し、見通しを持って授業に参加する

5年生から学習し始めた家庭科の調理器具や裁縫道具の写真を同じクラスの支援学級の児童とともに撮影し、道具の名前を覚えることに取り組んだ。カードには写真だけではなく、自宅で名称を文字入力したり、自分の声を録音し動画に編集した。またミシンを使う制作活動では、裁断の際に切る個所を誤ってしまったことから、授業の流れを示す写真やミシンの扱い方を教師が示す様子を児童が撮影し、自分で解説を入れることで活動の流れに見通しをもち、安心して学習に臨めるようにした。

## ○対象児の事後の変化

①自分で伝えてよかった、安心した、うまくいったという経験のために

SNSのやりとりでは、返事が来るのを楽しみに待つ様子も見られ、返事がすぐないと「つかれたのか」と相手確かめるつぶやきも送られてきた。スタンプを利用することを好み、イラストを写真アプリに入れ、スタンプとして利用する姿も見られた。文字入力も、音声での入力も楽しんで行い、災害時には教師の安否を確認する内容も送られてきた。文字会話であると、表示された内容をつぶやいて確認したり、自分が伝えたい内容を書くことに集中できた。文字での会話をしながら音声での会話をする、と、話題がそれることなくやり取りが続けられることから、授業でも隣席に座り用いた。

会話を続けたり、会話を深める経験をしたこともあり、通常の学級では、学級活動の時間に積極的に手をあげて質問をしたり、自分からお楽しみ会でやりたい出し物を提案したりする姿が見られるようになった。学校生活では、頻度は少ないが「もうすぐ〇〇があるから、お願いします。」と事前に困りそうな場面を伝えに来るようになった。また、児童が立候補した委員会の仕事をするのに、困りごとをそのままにしないで教師や友だちに伝え、何とか仕事をこなそうとするようになってきた。さらに、視覚化することで何を問われているのかが分かり、話したい内容がたくさんあることに気がついた。そして話しかけても相手が返事をしてくれる経験を重ね、安心して話しかけることができるとともに、話しかけられた時にも返せる語が増えてきた。

## ②相手に分かるように話し、会話を深めるために

○その場にふさわしいふるまいを問う問題に対し、「この問題はおかしいと思う。～した方がいいのに。」「うちのお母さんとはちょっとちがうなあ。」等、内容を正確に捉え、自分の経験と照らし合わせて考えを述べるようになった。また、話したいことのバリエーションも増え、話題からそれずに、詳しく話すようになってきた。また、急に話しかけられて返事に困るときにも「その話はあとで・・・」など切り返すことができるようになってきた。

### ○相手に伝わるように話す

話しかけた相手に聞き返されることは少なくなってきた。また、児童が意識してはっきり口を動かし、ゆっくり話せば、音声入力が上手く行くことに気づき、自分で確かめようとしている。ストローを使っての学習は後に、リコーダー演奏や水泳の学習など、口を閉じて息を吹き込んだり、口から息を吐く動作を含む活動にも生かされ、児童が自信を持ってできると言える活動へとつながった。

## ③少し難しいことも自分で頑張ったらできたという経験を積み重ねる

### ○音読

自分の声の音読を録音する日を楽しみにし、飛ばさず読もうとはしている。注意の移りやすさから文末を正確に読むことは難しいが、どうせ分からないと言って開くことの少なかった5年生の教科書を開き、読みたい単元を選んだことに、五年生として成長したいという思いが感じ取れた。また、3学期の推薦文を書く単元では教科書の文を音読して確かめ、知らせたいことを Simple Mind+で視覚化した後、keynote でプレゼンテーションを作成し、発表者ノートに音声で話したいことを入力して友だちの前で発表した。

### ○書く

通常の学級で掲示されることもある新聞や、作文は書くことの負担が軽減されたことから、書きたくないけれど仕方なくパターン通りに書くというこだわりからは抜け出し、何を書こうかなと言うようになってきた。また、入力することで予測変換を使い、知っているけれど書くことは難しい文字を使用したり、この時はこの字で合っているかと友だちに尋ねたりする姿も見られた。日記でも書きたいことを思い出しながら順を追って書くことができるようになってきた。アプリを使う場合、マッピングで整理して手書きで書く場合など、書くことへの取り組み方を自分で選ぶようになってきた。

### ○わかってできる

アプリで制作した手順書を見ながら、自宅や学校でリコーダーを練習した結果、1学期末には、はじめて音楽の時間にリコーダーのテストを受けることができた。また、2学期の合奏の際には自信を持って取り組める鍵盤ハーモニカに立候補したり、みんなで揃ってリコーダーを演奏できるよう練習に取り組むなど、自分で活動を選択できるようになった。3学期には友だちと一緒に卒業式の退場曲をリコーダー演奏しようと昼休みに友だちと演奏を合わせる様子も見られた。

また家庭科では、ロイロノートで道具の名称を覚えたり、授業の流れを知り、見通しを持つための動画を作成した。自分の声で説明している動画を続けて見た結果、児童が希望して入ったクッキングクラブや家庭科の時間の説明も教師の説明を聞いて理解し、教師がそばにいらなくても自分で用意をすることができ、友だちと一緒に安心して活動に参加している。

iPad のアプリを利用することで、自分でわかる手段を教師と相談しながら確保し、自宅へ帰ってもアプリを見ながら自分で宿題に取り組んだり、やっておこうと思ったことを忘れずに自分で取り組めることが、自信となっている。一生懸命やっているのに、頑張ってもできないという言葉を聞くことは今のところない。また、次々とやってくる新しい課題にも、教師に促されてはじめて取り掛かるのではなく、初めから自分でやってみようと相談に来るようになってきた。

## 報告者の気づきとエビデンス

### ○報告者の主観的気づき

☆児童は、自分が苦手で、できっこないと思い込んでいたことに取り組むため、自分で iPad を操作して取り組み、学習する自信をつけた。

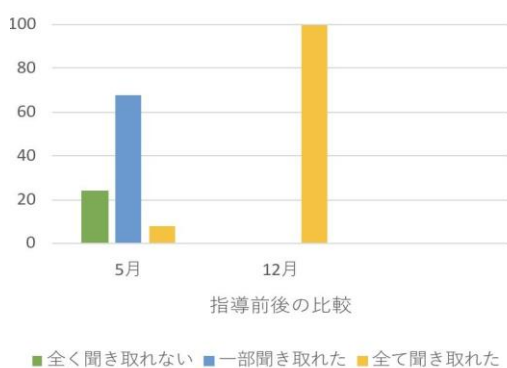
☆自分で話した音声や動画を使って、学習するツールを作成することを通し、伝える力が高まり、いろいろな活動に挑戦してみようとしているのではないか。

### ○主観的気づきに関するエビデンス

☆1 学期には休み時間に一人で校内の好きな場所を歩いたり、支援学級の友だちと過ごすことの多かった児童であったが、現在は一緒にいる友だちが増え、通常の学級でも安心していられる友だち関係ができてきた。また、楽器の演奏スキルが向上したことによりリコーダーの練習に誘われたり、スピーチで自分の好きなものを発信しようとしている様子を見て、共通の趣味がある児童が自分と同じだと気づき会話の幅が広がるなど高学年らしい仲間関係ができつつある。

☆児童ができるようになりたいと願ったリコーダーや鍵盤ハーモニカなどの楽器を練習することで、鼻呼吸をしてしっかり口を閉じたり、舌を動かすことができるようになり、相手に聞き取ってもらえる発音や話し方ができるようになったと考えている。また、発表活動の前には話す様子を自撮りし、うまくいっているか確認に来たり、以前の動画を見てふりかえったりするなど、自分で伝えようという意欲の高まりが、わかるように話すスキルを身につける支えとなっていると考えている。

☆児童は 4 月には集会委員会を選択したものの、他の児童のところにマイクを届けるなどの話すことの少ない役割を担っていた。しかし、10 月からは人前で話したり演じたりすることの多い児童会を選択した。音声入力でも児童の話す言葉が正しく認識されるようになり、話せば伝わることが実感でき、活動の選択肢を広げている。12 月には募金活動に立ち、大きな声で呼びかけたり、終業式の生活指導劇でも堂々とナレーターをやり遂げた。



グラフは本校職員 25 名(前期・後期の職員を含む)に動画を視聴してもらい、児童の話す言葉が聞き取れるかについて調査を行った結果。

・児童が苦手とするラ行音が含まれる【レベル 1 とレベル 2 をつなげてみましょう。】と話す動画で比較を行った。

・児童に日常接することの多少に、結果が影響されることはなかった。

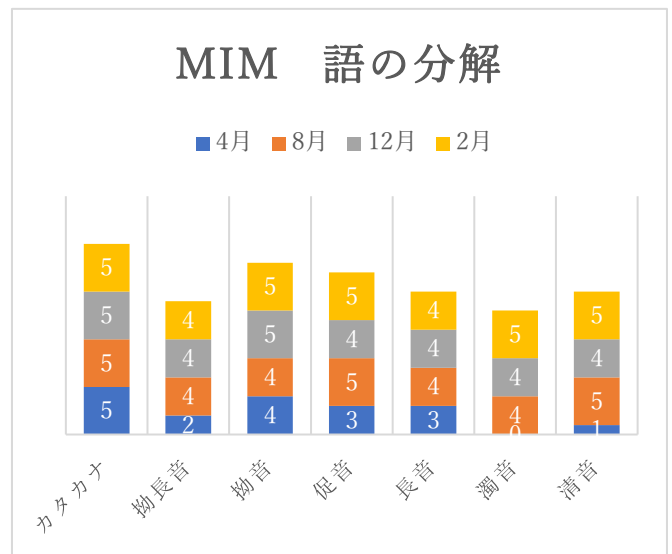
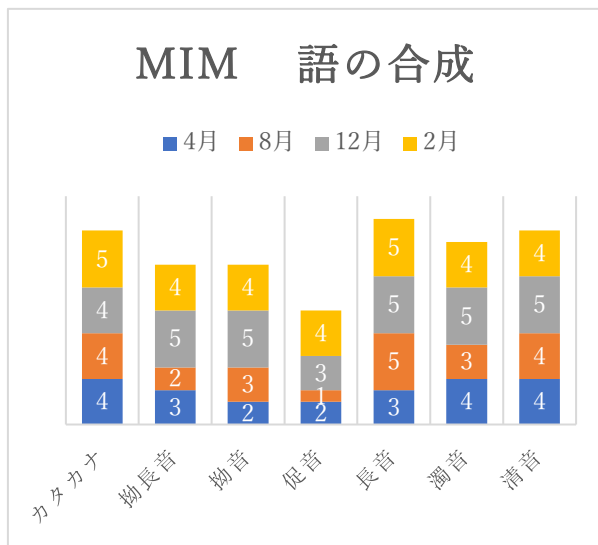




▲募金活動で呼びかけを行う様子



▲生活指導劇のナレーターをする児童



続けて取り組んだ MIM 課題でも、正しく答えられる語が増え、語のまとまりがとらえやすくなってきた。そのため、シナリオや読み原稿を自分で読み、友だちとも練習できるようになった。一方、間違いの原因が読みとばしや、誤って覚えた語概念である場合も見受けられる。語彙を増やすこと、知っている言葉の意味も言語化して確かめることを、今後も併行して学習に取り入れていく予定である。



▲素敵な 6 年生をめざして、やってみたいことをかなえるためにはどうしたらよいか相談しながら作成した手順(写真部分は動画)

少しの刺激でもバランスを崩し、自分の体を支えることができない児童であったが、6年生の運動会で、友だちといっしょに集団行動や組体操の演技をすることを目標に keynote で運動の手順を作成し、今から少しずつ取り組んでいる。上の写真は運動編であるが、そのほかに成長による自分の体の変化にどう対応していくかを考える「素敵な女の子編」など、児童がステップ 1、ステップ 2 と名付けて作成しては何度も見ながら 6 年生への期待を高めている。

#### 【今後の見通し】

- ・これまではできないと思いこんでいた活動も、iPad を用いて自分にぴったりのツールを作成すれば、自分で学習ができることに児童自身が気がついた。また、習得したスキルを使い続け、さらに新しい課題に挑戦するためには、学習したことを学校でも家庭でも同じようにフィードバックできる環境が必要である。そのため、児童が自分専用に学習用として使用する iPad を保護者が購入し、校内での使用を合理的配慮として認めることを検討している。
- ・児童は次年度 6 年生となり、進路の選択を迫られる。今のところ本校後期課程（7 年生）への進級を希望している。5 年生でできるようになったことを支えに、教科学習でも iPad を使用し、自信と期待を持って進路選択ができるようにしていきたいと考えている。